2015年11月15日発行　第27巻第12号(通巻319号)

短歌往来

月刊短歌雑誌

12

DECEMBER 2015

巻頭作品――大下一真

特別作品――玉井清弘＋大口玲子　評論――吉川宏志

連詩歌の試み（3）――大岡亜紀＋畑彩子

［特集］題詠による詩歌句の試みXIII　戦後70年

作品＝高橋順子＋岡井隆＋棗和田桃子＋井坂洋子＋栗木京子＋青柳志解樹＋蜂飼耳＋奥田亡羊
黒田杏子＋渡辺めぐみ＋三井ゆき＋池田澄子＋櫂陽節＋松村正直＋遠藤若狭男

連詩歌の試み Ⅲ

東京将門めぐりの巻

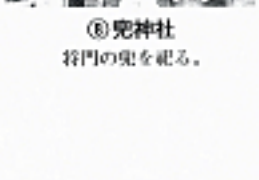
⑦鳥越神社
将門の首が神社を飛び越していったので鳥越（＝飛び越え）という地名になったという説がある。

④築土神社
将門の首を祀ったといわれる。

①鎧神社
将門の鎧を祀る。

⑤首塚
将門の首を祀る。

②稲荷鬼王神社
将門の幼名が由来ともいう。



⑥神田神社（神田明神）
江戸総鎮守。江戸城鬼門守護。

③筑土八幡神社
将門の鎧を祀ったとの説も。

⑧兜神社
将門の兜を祀る。

＊＊連詩歌の試み（3）＊＊

東京将門めぐりの巻

大岡亜紀（詩人）×畑 彩子

―東京には、首塚や神田明神、鳥越神社など、平将門ゆかりの場所が多くある。長く祟り神として畏怖されたが、江戸時代には総鎮守として祀られ、明治時代には再び逆賊とされた武将。その運命を想いつつ、ゆかりの地をめぐり、東京の移り変わりを心に留めながら編んでみた。

一

野に山にいくさ場に吹いていたあの風だけが
護られたものと奪われたものを記憶していた
敷島の都にもののふは鎮まる　いまは神として

二

幾千のガラス纏いて立ちあがる高層ビルに朝陽は流れ

―ビル建ち並ぶ日比谷も、江戸初期には入江だった。

三

入江も川も土地になり　なおも拡がる八百八町
機影が地球に描きだす　羽田からの大きな弧

四

わたくしはみつばちであり楡でありお濠に浮かぶ昼の半月

五　台詞を忘れた学芸会の舞台のうえ
　　冷や汗で目が醒めた
　　はじめから　覚えていなかった？

六　夜半過ぎて寝床に入ってきたカエルしっとり冷えた翡翠の皮膚の

七　雨を聞きながら　ぼくらは濡れる
　　くちづけに染まっていく君

八　桜木の元に埋めたき過去もあり流れ流れて「隅田川」聴く

九　今は昔の伊勢物語
　　みやこ鳥とは　お前さんかい
　　言問いに一瞥もくれず　ユリカモメ

十　老い父の頬もゆるびてゆく午後の天野屋あんみつ甘酒もあり

十一　指に踊るメロディーと休止符
　　鍵盤に生まれていくメヌエット　ト長調

十二　地に落ちて踏まれ破れて屑となる紙飛行機よ　常盤橋ゆく

十三　すめらみことは幼きままに　浪の下なる都に住みて
　　見るべきほどのことをば見つと　武者は身を投げもはや猛らず
　　わたつみ光りなにも語らず　うたかたのごと世は事もなし

十四　炎天に駆け去り戻らぬ野馬のごと息子旅立ち夏ははじまる

十五　果てなき草原に揺れながら
　　わたしを待つのは　わたしの影

　　―兜神社に参拝すれば、持ち株が上がるという。

十六　マクベスとベニスの商人隣り合い意気投合する兜町カフェ

十七　汽笛を鳴らし　船は闇をかき分け進む
　　うつむくのを止め　仰ぎ見たなら
　　滴るように囁いてくる星座の群れ

　　―莫大なエネルギー消費都市東京よ、栄えあれ。

十八　兼震つづく関東平野に居る神は永劫の火を危ぶみており

＊　二〇一五年五月十二日～五月二十五日　創作